

---

# さよなら、ブレード

しまらりる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さよなら、ブレード

### 【コード】

N5719W

### 【作者名】

しまらりる

### 【あらすじ】

石川真由。県立瑞乃江高校3年生。

平凡な彼女の日常は、突如校舎に落ちてきた隕石により一変してしまふ。

事故の際吸い込んだ謎のウイルスによって、凶暴な怪物へと変貌してゆくクラスメート達。

奇跡的に感染を逃れ、これを駆除できる因子を持っている事が分かった真由と霧島亨の二人は、人類を代表し秘密裏に同級生を殺害する使命を託されてしまう。

望まぬ罪と呵責。過酷な運命は、次第に二人の心を蝕んでゆき……。

不定期更新となります

1・よろこびそうじなおね(前書き)

2011年9月14日

推敲しました

## 1・よろしいそこになおれ

月が雲間に隠れて行く。

ふう、と重いため息を吐き、今夜もその場所であたしは人を待ち続けていた。

県立瑞野江高校正門前。

現在がっしり門扉は閉じられ、防犯システムも作動中、ときたまんだ。

わあ。

セコムしてますか？

全く、物騒な世の中に成ってしまった物だ。キムタクもCMの画面で嘆いている。

ついでに、あたしはこれからそこへ侵入しなければならぬ訳で、今こちらの身分としては、ちょっと厄介な所でありんす。

さてはていったいどうしたものかと、あたしは電柱の影に身を隠し出方を伺っている。

風がぴゅう、と吹き桜の木の枝を揺らしていた。

うゝむ、しかし……今夜のこの気温は　　寒いっ！

五月もまだ半ばだと云うのに、あたしはガチガチと震えている。

おかしいっしょ。

現在、外の気温は六度。

明日からまた雨だと天気予報のおねーさんは伝えている。

やべえ……下にスカートとか履いてくるんじゃないよ、ガツクシ……。

嘆いてももう後の祭りなのさ。

……頑張ろー、おー。

気を取り直して再び、あたしは監視を続けるのでやんす。

校門脇の守衛室の中には明かりが灯っていて、ハゲたおっちゃん  
が夜食のどん兵衛を啜っていた。

……畜生オオオ！

腹減ったアアアアア！！

あたしが腹いせにガツンガツンガツン蹴りをガードレールに叩き込んでいたら

「何やってんだ、石川？」

突然背後から何者かの声が掛かる。思わず振り向いた。

「……やつと来たか」

あたしはそこで、ぬぼーとつつ立っている一人のクラスメートの姿を発見する。

きりしま おと霧島亨。歩く朴念仁。

相変わらぬの眠そーな瞳に、今日は寒いのか青のスカジャンを羽織っていました。

……お前いつもその格好だな。

悠々三十分遅れだ。

超マイペースな彼にあたしはキレかけ

「おいコラ、霧島」

「じろり白い目で睨みつつ、奴の名を叫んだ。」

「遅いッ！！今まで何してた！？」

鬼の形相を浮かべあたしが訊ねると

「あー、悪い。晩飯まだだったんでジヨイフル寄ってきた」

しれっと反省も何もない表情を浮かべ、彼はそう答えてきたのである。

「……じよいふる……ですとお？」

思わず青筋が、ぴくり。

あたしのこめかみは痙攣しだしたのだよ。

「美味かったよ。ハンバーグ定食」

更には止め一言。

うおお……我が脳内には、肉汁の滴るあのすばらしいかほりが……。

「宜しい。そこに直れ。今からたたっ斬る」

眠れる大魔神を怒らせた罪は大きい。

しゅららしやきーんと、刹那腰に提げていたモノホンの刀を抜く。  
「ちよ、石川？」

慌てて霧島が怯み、後ずさりしてみせる。

銃刀法？

ノンノン。ここではあたしがルールさ。

「安心せい霧島。明日は生ゴミの日だ……」

奴の顔面に冷や汗が滲み

「きつちりしつかり膾に刻んで、そのままゴミ袋へポイしてやるわあッ！」

うおおおりゃあああ！！

いきなり切りかかるこのあたしこと、石川真由。今日から辻斬り強盗。

前科なし。補導歴なし。

ついでに県立瑞野江高校三年。成績は中の並み。

体型　　うっさい聞くな。どうせおチビだし胸もねえよっ！

貧乳はステータスだとかなんとか……んなもん幻想だっ！

目を覚ましやがれこの二次元童貞イイイイ！  
だんっ。

ひらり宙を舞うタータンチェックのスカート。バックステップする霧島の長い足。

彼の足下にはナイキのダンク。人気のバッシュモデル。あたしの白い刃と月の下、交錯する。

軌跡は弧を描き、衝突。

刃先は惜しいかな、この時虚空を掠め、アスファルトの上に激突。カリリと線を引き、小さく火花を散らす。

惜しい、逃がすか待てコラ。

あたしは追撃。第二波の斬り上げを繰り返そうとした。

と、その時突然。プルルとあたしの胸元で携帯が着信音を鳴らせた。  
ぬお、誰じゃ？

余の処刑を邪魔する不届き者は？

「あい。石川っス」

少々不機嫌な声と共に、あたしは電話を取る。

『石川さん どう？ もう中に入った？』

電話の向こう側から若い女性の声が聞こえてきた。

うおう！！ あたしはその瞬間、顔面引きつり苦笑いっス。

やっべええええええ！ …… すっかり忘れていたよ。

御子神さん。あたしら直属の上司から、確認の電話が掛かって来たのだ。

『で、どうなの？』

問いつめる御子神さん。あたしは汗ダラダラだ。

うひゃー！ こっ、これはもう土下座するしかないっ！？

全然っス

どうもすみません

『……もう、何やってるの？ 敵に逃げられちゃうでしょ』

てへえー 本当すみません。

こつんと頭を小突くや否や、あたしは舌を出しそれを誤魔化していた。当然向こうには見えないわけだけだ。

「今霧島と校門の前にいるんで……これから突撃しやっす！」

『頼むわよ』

「あい、さー！」

そんな調子のよい返事と共に、あたしは電話を切った。

「御子神さんか？」



うむ。ただ今ボスよりお叱りを受けた旨を、あたしは相方へも報告する。そんでもって舌打ち。

いやいやほんとに惜しい……。あと数秒遅ければ、確実に殺れたのに ネット

「ネツ、じゃねえよ」

どあほう。と鋭いツツコミを入れる霧島を、この時あたしは無視。「それよりそろそろ行くべ」

また御子神さんに怒られちゃかなわんと、彼を連れ校門の前に向かった。

ああーんおんおん、とご近所ではわんこが吠えている。

コンコン、と接近したあたしはガラス戸を二度ノック。

「はい、何か用ですか？」

不用心なおっちゃん顔が覗かせた。

きらりーん 今じゃっ！

「ぐばー！」

直後、情けない悲鳴がそこに炸裂。

守衛室のおっちゃんあたしらの 峰打ち + 催眠ガスのダブル攻撃を食らい、敢えなく撃沈してしまったのである。

「ごめん」。しばらく眠っていたきやす。

そしてこの隙に、あたしら二人は検問突破というわけさっ！ ちよろいちよろい。

「毎回仕事のためとはいえ、この人も不憫だよなあ……」 哀れみの視線を送る霧島を、あたしは背中が無視する。

毎回化け物騒動の最初の犠牲者は、警備員と相場が決まっているのだ。

あゝめん。

2・YOU達もうすぐ死ぬYO！（前書き）

暴走開始（ネタ的に）

## 2・YOU達もつすぐ死ぬYO!

夜の闇の闇にそびえる校舎は、普段見慣れているはずなのにかなり不気味だ。

「よし、開いた」

正面玄関の鍵を霧島が開け、そこからあたしらは忍び込んでゆく。懐中電灯が照らすあたしの影は、いささか緊張しているみたいに思えた。

無理もない。

なにせ、私たちはこれから化け物退治に行くのだ。

そう……

それはあたしらしらにしか倒せない特別な 因縁深い、元クラスメイトだった。仲間を。

あたしの目の前に映るのは、生徒用の下駄箱だった。

「ねえ、上履きどうしよ」

すのこの上で靴を履き替えるかどうか霧島に相談した。

「別にいいんじゃない？」

敢えなく、霧島からそんなひとこと。ま、確かにそれもそうだ。

「お邪魔します」

と、靴のまま連絡通路へ上がる。そろりそろり。

《こちらスニーカー。現在正面ゲート前に到着した》

なんか、この雰囲気ってそんなかんじ。

「石川、なんかお前今日楽しんでんなー」

いや別に楽しんでるわけじゃないっすよ? ……ただビビりを誤魔化しているだけです って、あ、ちよつと霧島……置いてかないで……。

あたしを差し置き、彼はどこかへスタコラサッサ。

うおーい、まじでっかー……。仕方がないのであたしは、ちよいとこれまでの経緯を振り返ってみた。

すべての災厄。

それは、一月前に突如私たちを襲った。

桜が満開な四月のとある日。体育の授業中、あたしらの学校にちゅどーん！といきなり体育館の屋根を突き破り隕石が落ちてきたのだ。

いやあ、あれにはマジでひびった。

とても小さな隕石だったため、誰も怪我することなく済んだのだけれど……。

落下した隕石はその直後、余りに突然の出来事に事態の把握すら出来ていない私たちを余所に、突然ガスを吐き出したのだ。

あたしが覚えているのは、あの赤みがかつた不思議な煙だ。たちまちそれは建物の中に充満、そしてあたしは息が苦しくなり

気づけば皆近所の病院へと運ばれていた。真昼の大惨事だった。

その日はすぐに帰された。

けれども……。本当の惨事はその後から始まったのだ。まさか、あの隕石に未知の病原菌が付着していたなんて……。

最初の感染者はその数日後に再び倒れた。彼女は隔離され、その翌々日、突如、死亡。という事になっている。

けれども実際は違う。……。もっとおぞましい物に生まれ変わり、きつとあの人たちに駆除されたんだ……。

あたしはその事実を知らないまま、その後再検査を受けさせられた。

名目上は未知のウイルスに感染していないか、の調査。連れて行かれたのは「北鳩遺伝子研究所」。

んん……？ なんだか雲行きが怪しくなってきたぞ、これは……。怪しんでいる間にあれよあれよと検査を受け、その後何故かあたしと霧島二人が建物の中に残されていた。

やべ……

これってアレか？

「お気の毒ですが感染しちゃいました（はあと）」

You達もうすぐ死ぬYO！

若い身空でこの世とおサラバだYO！

HaHaHa……って……

ざっけんなああああああああああああああああ！？

思わず悶絶してしまつところではないか。

いや、実際には違ったんすけれどね、うむ。

早とちりって、怖いわ（うふ）。

なんやかんやで、あたしが勘違いをかましている間に物事は進み

……。

さて。

もし、今日からいきなり「人類のために戦え」と言われたら、あなたは一体どんな返事をするだろうか？

（以下の選択肢の中から答えよ。配点／1点）

A「ねえ、カメラどこ？」

まずは辺りを見渡す

B「宗教なら間に合ってます」

そのまま素通り

C「うつせえとつとと帰りやがれ」  
いきなり撲殺

D「レッド以外は認めない」  
自己中なあなたにお勧め

ちなみに、あたしならCだな。C。

速・攻・撲・殺ッ！

によほほほほほほほほほほっ！！

だって、ウザいじゃん？

世界平和なんて知ったこっちゃねえっの。それは国連の仕事で  
しよ？

あたしはオバマでもウサマでもムジャヒツディーンでもなんでも  
ない。

殉教者みたく小脇に爆弾抱えて死ねるかーっ！

あたしやあれよ花よと散る前に、しっかりちゃっかり青春を謳歌  
したいのだ。

そうだ！ 天寿を全うしたいんじゃ、ぼけー！

……でも連中は、そんなあたしの意志などお構いなしに、勝手に  
あたしをヒーローに仕立て上げたんだよなあ……。

正直イヤーンな感じ。

だから敢えて言わせてもらおう。

まいっちんぐ、と（笑）。

3・イーと叫べば良いのか？(前書き)

相当に読み手を選ぶ作品です(苦笑)

### 3・イーと叫べば良いのか？

【EW細胞破壊因子保有者・一号】

……はい？

説明を受けた時は何スカソレ？ って思いましたよ、あたしや。

呼ばれた検査室の片隅に置かれたホワイトボードの上に、なんかそんな書かれてあんの。実際。

因みに霧島の奴は二号だ。

仮面ライダーか。

ここはシヨツカーの秘密研究室で貴方は死神博士か。イーツ！

やたら薄っぺらな肌寒い検査服何ぞを着せられて、

「おめーらここで待ってる」

と言われ、待たされる事数分間。茶くらい用意しろこのばかりやろ  
！。

あたしは駄々を捏ね足をぎったんばったん。

やがて、コーヒーの代わり差し出されたのが一枚のカルテ。

瞬間ぴんと来た。

嗚呼、なるほど

あたしや悟った。

死ぬんか。やっぱりあたしら死ぬんか。

だって「陽性」って思い切りそこを丸で困ってあるし。井上陽水  
じゃ無くして陽性。

何かが今日もリアルでシユールな、青いシャドウ

……全然似てねえし。

あかん、こりゃポツクリ逝くわ。

世紀末霸王様の剛掌波食らって、血をびしゃー、ってブチマケテ。  
うん。ビジュアル的にはそんな感じで………嫌じゃあああああ

ああ！？

おいおいと泣くあたし。さめざめと泣くあたし。

「腹ククレ」と横からぼそり霧島のきつつい一言。



ひでぶ。

天に、天に還る時がキタのだけ。

十七の若い身空で早棺桶か。念仏唱えてほなサヨナラ、ってか。うとうとう……めがっさ親不孝だ。あたしや。

「あの〜。一人頭を抱えて勝手に悩んでる所を失礼ですが」  
「何スか!？」

声に反応しがばつと飛び起きるあたし。目の前に座る人物の胸ぐらを掴み

「死ぬ前にせめてハーゲンダッツ死ぬほど食わせろや、オラ」

なんて脅迫じみた迷惑行為に手を出そうとするあたし。かなり凶暴です。

「落ち着けや」

御子神、とネームプレートを下げた白衣に眼鏡の色っぺーねーちゃんからあたしを霧島は引き剥がす。

「あはは〜躰がなくなってすみません。ほんつとすみません」

そんな愛想笑いを浮かべつつ、奴はあたしの額を机に押しつける。ぐりぐりごりごり。……鼻があたってまんがな。もげてまうがな。

何故だ!？

何故いつもあたしの周りには不幸ばかり押し寄せるんだド畜生お

おおー!!!

「霧島お前もグルか!？ よってたかつてあたしをイジめるんかー!」

「落ち着け」

泣き叫ぶあたしに、霧島はいきなり延髄めがけ強烈馬場チョップ。あう。

石川真由。敢えなく轟沈。

享年十七歳。ち〜ん。

二人のザオリクでやがて復活した頃には、すっかり陽も暮れて外は真っ暗でした。

4・海原先生のお墨付きです(前書き)

みなぎるカオス

#### 4・海原先生のお墨付きです

キューピー化け物三分クッキング！

くちやららっちやっちやー

ちやららっちっちや

ちやららっちやっちやっちやっちやちやちやちや、たらりら

ぱーん

【この番組はえげつない石川と霧島の提供でお送りします】

はい今日は、宇宙から飛来した謎のウィルスによって化け物になったお友達を料理したいと思います。

まず用意するのは、活きの良い化け物！ ん〜今日もばんばん人殺しちゃってますねー。やっつけるにはこの上ない素材です。

「フウム……この化け物の色と艶はどうだ」

某美食倶楽部からお墨付きが出ました。完璧です。

やりまんね〜ん

今日はだれをっ やりまんね〜ん

ノリノリです。思わずキャシイ塚本の替え歌を口ずさむ勢いです。

では、次の手順に移りましょう！

今度は化け物を狩る人を用意します。これは、化け物に負けないくらい強い人間が必要です。

万が一彼らの攻撃を受けたとしても、ウイルスに感染しない強い抵抗力があればよりベター。頑張って探してみよう！

お次は得物の用意となりますが、これは基本何を用いても構いません。怪物のコアに破壊因子の体液を付着させる事が目的なので、長い刃物もしくは強力な銃があるとやりやすいでしょう。以上で下準備は終了となります。

それでは、早速料理に取りかかりましょう！

まず、レディファーストでか弱い乙女を囿に使用します。

……  
……  
……。

やめい、絶対あたしが死ぬわ。

「アレ、俺の作戦に何か不満？」

霧島が実にさわやかな笑みを浮かべあたしに訊ねてきます。

ものっそい不満ありまくりじゃこのボケ、とあたしは返してやりました。そいや！

「うむ。我ながらナイスな作戦だと思うが……」

あたしの馬場チョップを華麗に回避し、顎に手を乗せる霧島。本気でそう思っているならチミはかなり重症DEATH。

「とつとと医者逝け」

出口の方角を指さすあたしに

「アハハ、やだなあ石川。そんな怖い顔しちゃ可愛くないゾ？」

またもや霧島が笑って返す。

宮・迫・です、みたいな妙なイントネーションを付けるな。指を指すな、こら。

ゲツツか。ゲツツがしたいのかお前は？

このウザさは阿修羅すら凌駕する存在　よろしい、氏ね。

しゅららしやきーん、とまたもやあたしが抜刀。

「それは全力で拒否する」

ういー、むーっしゅ！

ああああ……なんか疲れる。すんごい身体が疲れるツ！

肩が重い！　肩が重いぞ畜生おおお！？

「更年期障害？」

違えよ！

なんで爆笑問題の田中みたいにあたしが叫ばなきゃならねーんだよ！

思わず頭を抱え「もう帰りてえー！」と本音をぶちまけたい所を堪えるあたしは偉いぞっ！

泣くぞっ！？

「……ん？　石川、なんか顔色悪いぞ？」

先生……霧島君が空気を読んでくれません……。

「誰のせいでこうなったと思ってんじゃあああああああああああああああああああああ  
あああああああああああ　　！？！……！」

あたしの絶叫が、夜の校舎に響き渡ってゆくのであった。

5・小須田部長とワンダーフォーゲル部(前書き)

ぶつちやけ詐欺小説である

## 5・小須田部長とワンダーフォーゲル部

が〜んばれ〜

まけ〜んな〜

ちからのかぎり〜いきてやあれ〜

とほほほ…… てやんでえ……

小須田部長のテーマソングを口ずさむあたしから白いエクトプラズムめいた物体が漂っているわけですが、拝啓父上母上　その後いかがお過ごしでしょうか。

る〜る〜　るるるる〜る

「父さん、今年の雪はいつもより早く降り始め……僕はまだこの富良野の暮らしに……慣れないわけで……」

おおい、純、蛭〜

る〜る〜るるるる〜

「　時に僕は、どういっわけなのか霧島と真夜中の校舎を探索中なわけで……」

『おい石川石川』

「相方の霧島のアホーは、全く僕の話の聞いてはくれない、所謂頭

の痛い子なのであつて……」

「石川石川」

「父さん。正直僕は、さつさとこんな奴とは別れ正しい青春を謳歌すべきで……」

「だから石川」

「なにさッ!?」あたしが倉本聰ワールドへ現実逃避することに一体何の不満があるのでしょうか、こやつは?

あたしや全身から不機嫌のオーラをぷりぷりと発散、霧島の方を向く。何故か彼の表情が青い。

「足下」

「あし?」

そこに何らかの意図を感じ、彼が指さすその方向を辿ると

おつやくあ? 床がねエなあ??

「そこ、階段なんだけど……」おK。皆まで言つな。この場合、あたしが取れるリアクションは唯一つだ

期待通りに逝ってきますorz

「ぐべらぼげらバキュラッ!?!」

何故か某STGで登場した256発弾を当てねば壊せない強敵の名をそこに交え。



あたしは世界最速のハリネズミ、ソニック・ザ・ヘッジホッグも顔まつつあおな勢いを持って、階下めがけて超転落。

どっかーん！

衝撃！

ベスト！

プラーイイイッスつっ！

やがて踊り場へ激突。見事リノリウムの床をぶち抜き、派手に人型に陥没。そのまま気絶する。まんまトムとジェリーだ。葱少なめ、赤いおつゆはだくだくだく……カメ野菜生活。リコピンがデコピン。あたしピクミン。

意味など聞くな。あたしにもまっこと分からんですたい。

「お、おい石川……大丈夫？」

上から身を案じて霧島が声を掛けてくる。

わあ亨くん意外と優しいのね惚れちゃいそうだわ　ってんな訳ねえだろっ！

「い……生きてる？　生きてたら返事くらいしろよな……」

大丈夫生きてます生きてます。

上からから聞こえる霧島の声に、へろへろガクガクな腕を掲げ勝手に殺すなとサムズ・アップ。

人間なかなか死なないもんですね、正に動物奇想天外……あべし。  
「あ、逝った」

すんません今の全力で撤回。

涙ながらにあたしは思った。

これで大丈夫なら人生大半の事には耐えられそーな気がする、と。ほんとすげーよ、あたしっ！

今ならセクシーコマンドーでマサルさんにも勝てる気がする！

よっしやキャシャリンばっち来いッッ！！

意味不明なまま額からどばどば血液が流れて行く。……あかん、意識が朦朧としてきた……。

「おーいいしかわー？」

へんじがない ただのしかばねのやうだ

「墓石には『ヘタレ』って刻むぞ」 うんそいつあなかなかグッド  
センスだね霧島。

後はよろしく頼んだ。あたしゃポツクリ逝く。

「お、白か」

……もとい。

いくら不可抗力とは云え、めくれたスカートの中身を覗くこいつ  
はなんなのツ!?

そしてこめかみはぴくりぴくり。

あたしのぷりちーな下着を拝む(ついでに触る)このセクハラ馬  
鹿を本当どーにかしろ! おちおち死んでもいらねーよっ!!

「うーんホントええケツやな嬢ちゃん」

霧島があたしの臀部をすりすりやらモミモミやら。

……触り方がやけにおっさん臭いのが無性に腹立つわ。ブチ切れ  
たわ。「あっ……いやん らめえ／＼」

等と現在進行形で桃色わんだほーな痴漢行為をされとるあた  
しですが、いかんせん頭のCPUがショートしてそれどころでは無  
いのだ残念だったなおめーら。

よっしや、腹筋しようか?

斜線に萌えるな騒ぐな。

あんたら四十五度マニアかそうか変態か 　　ってわけがわからん  
わ程良くゲシュタルト崩壊。

そうか、ナニの角度か。

「いやん。石川さん破廉恥／＼」

台詞に三本線混ぜんな! うぜえええ!

「じゃかあしいわっ!!」

の一喝と共に、黄泉から舞い戻り大魔神石川が全力デスシャウト。  
「痴漢は犯罪じゃばけええっ!!」　ぜーはーぜーはー。

HPゼロでMPも底をついたわ!　どないせえっちゅうねん!

「おや、おかえり石川」

空気読めない奴こと霧島は何の悪びれもなく爽やかに歓迎のハグ  
抱擁。

……ああ頭が痛え超痛えー豊川悦司みたいにホンバヘツしちゃうぞー!?　超能力発動しちゃうぞー!?

……若干ネタが古いな。

「武田真治と共演してたやつな」

「人の脳量子波に干渉してくんなばけええっ!」

人革連のデコちゃんみたいにあたしが叫んだ後、ぴしつと柱に亀  
裂が走ったのは言うまでもない。

断じてあたしの所為ではない。

すべて霧島の所為だ。

取り敢えず一発殴っておこう、げしつと。

そしてあたしは、また拳を振り上げるのであった。

ん……?

誰が暴力女だって?　おいコラ。

5・小須田部長とワンダーフォーゲル部（後書き）

そして作者は確信犯でもある

## 6・バファリンとキャシャリン

「バファリン飲んでえ〜」

「ありません」

「バファリン飲んでえ〜」

「何度も言うようですがありません」

「キャシャリン揉みてえ〜」

「意味がわかりません」

どうも 真由です。

現在オーバーヒート中です。理由は聞かないで下さい。先の一件で人格ブツ壊れてしまった模様です。

今は霧島に駄々をこねまくってます。小児用バファリンおいしいです。えへらへらへら……。

半径一キロメートル圏内に立ち入らない事を激しくお勧めします。

あ、今回もカオス展開です。

「 ええかげんに、しなさい」

あだっ

霧島のツッコミが痛いのでそろそろお話を本筋に戻します。結局いままでの流れはなんだったのでしょうか？

う〜ん。ま、いつか。

さて、ちよっくら気合い入れて解説してみよう。

ここは三年教室の廊下なのである。

県立瑞野江高校の校舎は、ちよっど中庭を挟み“口”の字の型に建

てられている。現在地はその右側。方角的には、真東だ。

教室は外側に面して作られている。つまり今あたしと霧島がいる位置からは、全校舎の窓が一望できるのだ。

夜の闇に紛れ、中庭の噴水の水が怪しく揺らめいている。

いつの間にか時刻は九時半を回っていた。……今夜は見たいドラマがあったのに……。

と

「 いっけねエエツ！」

あたしはいきなり大声を上げ絶叫する。

「 な、何！？ どうした石川！？ 」

霧島が目ん玉ひん剥いて驚きまくりの桃の木ダヨー。

大変です！

「 T S U T A Y A に今日DVD返すの忘れてたああああアア！！ 」  
洒落にならん！

延滞料400円払う羽目だけは絶対に嫌だぜハニーイイ！！

あたしは頭を抱えて悶絶キユー。

原因。

ずばりプリズン・ブレイク全シーズン一週間制覇とか流石に無理が祟ったねトホホ……。

「 金額すげー事になりそうだな 」  
ついで。

お財布の中身がひゅるりひゅるりらと風と共に去りゆく情景が目  
に浮かぶのであります……

さーよーなーらー

ただーただーただー

いとーしいひつびよー

うつろ……。来世は絶対銭ゲバになりたい……。

泣く。

がつくり地に膝を着き、さめざめとあたしは泣く。

「ま……なんだ。どんまい」

そんなあたしを霧島は励ますのであった。

ヤサシイナーオマエ……。

0・1ミクロン（だけ）見直したぜ霧島。

彼をお供に三階の探索を切り上げ、やがて階段の前で足を止めた。

と、一瞬階下から何者かの足音が。

「!?!」

あたしらは互いに顔を見合わず。いよいよ敵のお出ましか!?

腰に構える得物に颯爽と手を伸ばす。

あたしの武器は日本刀。そして霧島が構えるのは、フラッシュ・ライトを備えた大型の軍用ピストルだ。

『STEYA M9』と刻印が施されたそれを、シャキンと後ろまで引く。初弾装填。

この銃は、トリガーと安全装置が一体化した特殊な作りだ。（何故あたしがこんなに詳しいのかというと、ミリオタ+腐女子なあたしのクソお姉様のお陰なのだorz）

あれで一児の母親とか信じらんない……。

（用意はいいか?）

霧島が無言であたしに目配せ。あたしは首肯を返す。

（行くぞ）

そろり。緊張に顔を強ばらせたまま、霧島が先行で階段に足を下ろしてゆく。踵に重心を乗せたストリーキングという特殊な歩き方で、足音を立てず、確実に一步を踏み込む。壁を背にして、視界を広く取るのも軍人ならではの技だ。あたしらは二週間みっちりそれをたたき込まれた。

霧島が先ず階段踊り場……中央部まで移動する。安全を確保。次いであたしが即座にその地点まで移動。鞘の紐は手にぐるぐるに巻

き付け、いざ何かあった時落とさないように……そのまま鈍器として対応出来るよう構えた。

二階廊下へと続く暗闇。

敵は？

足音はどこから？

気持ちは高ぶり、神経を尖らせてゆく。ごくりと生唾を飲み込んでいた。視線を四方へと巡らす。

床。壁。窓。天井。目の前の通路の奥。曲がり角の闇に遮られ見えない、2-4の教室やその反対側の図書室やトイレの入り口等も。ぴちゅん。蛇口から滴り落ちる雫の音だ。

はっ。深く息を吸う。

どっ、どっ、どっ、ど……と、脈拍が上がり絶え間なく血液を全身に送り出す心臓の鼓動。

汗が。うっすら首筋を伝う、薄い汗が。

拭いたいが、一瞬の判断の間違いが即命取りとなる。

「は、っ……は、……っ……く……」

見えない何者からの重圧によって、意識せずとも呼吸が乱れて行く。喉の奥が熱い。喉の奥が痒い。鰐元に手を添えた指が。

かたかたカタ……と、小刻みに痙攣している。

畜生、治まれ……治まれえッ

「はっ。く……。うっうっうっくうっうっ……」

額からぴちゅん、と、あたしの緩い波を描く前髪を伝い汗が零れ落ちた。

「居ない……みたいだ」

やがて静かに、霧島の唇がそう言葉を紡いだ。

ふっふっふ……。

どっと、力が抜ける。緊張が解け、寄りかかっていた壁に、自然長い息を吐きながらずりりと身を預ける。

背中にひやりとした壁の冷たさを感じる。掌に湧いた汗を拭う。



「移動、するしかないな……」

囁くよう静かな声で、霧島。

まだ油断は出来ない。

このいかれた長い夜は、まだまだ終わりを迎えない。

「行こう」

彼に続いて、角を右側へ。

あたしらは校舎北側の探索を始めた。

## 7・クラスメイト達への供養

抗Cウイルス細胞。

Cはクリーチャーの略。

即ち、宇宙からやってきたあたしらの敵　　感染して化け物となつた生徒等の事だ。

あたしと霧島のみがその細胞を有し、未知のウイルスに体に乗っ取られる事無く適応している。あたしらの体内で作られる酵素は、その他同一の種と交わると壊疽を引き起こせる事が研究で分かったのだ。

但し、体外でその効果を発揮できるのは凡そ三分間。

ウルトラマン並みの早さであたしらは敵と接し、これを打ち込まなければならぬ。

怪物の細胞は熱にも薬品にも強く、確実に葬るためにはあたしらの血を使うしか他に方法が無いのだ。まさか一市民を殺すため戦術核を用いる訳にも行くまい。

あたしら直属の上司で、研究所主任でもある御子神さんはあの時こう言った。

「貴方達は、人を殺せる？」

無論、その質問に対するあたしらの答えは「ノー」だ。

自分達にはそんな事をする勇氣もなければ、意志もない。義務や使命感なんて以ての外。

「そう……そうよね。ひどく酷な事を頼んでいるのは十分承知しているわ……」

でも、貴方達にしか頼めないし、やらなきゃ人類が滅ぶ　　彼女はそう言っ頭を下げたのだ。

きつと自分の意志で頼んだ物ではなかったのだろう。

それでも、彼女は対策本部主任という立場から逃れられないから同情と責任感との狭間で、あの人もまた、葛藤し悩んでいたのだ。

から。戦っていたのだから  
やだ。

それでもあの日、あたしは抵抗し激しく泣いた。  
涙が枯れ果てるまで、彼女の胸で泣き続けた。  
母親のように背を撫でられ。

泣きじゃくる事で感情を全て吐き出し、これから待ち受ける皮肉  
にせめて抗おうと必死の努力をそこに込めようとしていた。  
結局、無駄に終わってしまったけれども。

「石川」

今、同じ運命を歩む相方と二人で、暗闇の中に佇む。

「泣くなよ。今日は」

霧島がそう念を押す。

「……おう」

あたしは正直ちよっぴり自信なさげ。だけれど、彼に迷惑は掛けない。何故ならあたしらはパートナーだから。

これから行うのは、あたし達が斬るクラスメートらへの供養。

「背中は任せた」

「あいよ」

あたしは意を決し、凜と返事をする。そろり図書室の引き戸へ手を伸ばし、それを開けようとする　と

「待った」

突然、霧島の腕がそれを制した。

扉にほぼ押し付けるような形で、彼は銃身のフラッシュ・ライトを灯し、引き戸の周囲を照らす。

ここ、と指さしたその先に、だらりと糸を引く黄味がかつた粘着質な何かが張り付いている。奴らの体液だ。

（中に？）

（おそろく）

無言で意志の疎通を交わし

「ちよっとそれ貸してくれ」

次いで霧島があたしの刀を取った。静かに静かに、そつと鞘の先端で扉を引き開けてゆく。なるほど、確かにそうすれば直接手で開けるよりも安全だ。

ライトの光を隙間から差し込み、鋭い矢のような光で室内の闇を探る。これもまた牽制。

だが、そこに敵の姿は見えない。きゅ、と自然指に力がこもる。

霧島が光の輪を素早く左右に巡らす。目潰しならなんらかの効果をはつきする動きだ。

だが、それで何の反応もみられないという事は……。

「足下気を付ける」

歪な光を返す先程の液体が、床にも点々と続いている。

摺り足でうっかり滑らせぬよう、あたしも注意しながら潜入する。何故か風が生温い。

ふと違和感に気耳を澄ませた。空調が付けっぱなしのまま放置されている。

送風機からの緩い風が、乾いたあたしの肌を撫でる。また呼気を闇に吐き出す。

「ん」

かつんとあたしのつま先に何かが当たった。あたしはある物を目に留め「霧島」彼を呼び止める。彼は警戒しつつ書架の方へと進んでいる。何だ、と視線はそのままにあたしへ返事を寄越した。

「これ」

閲覧席の端に隠れて落ちていた、細長い携帯を手に取りあたしは彼に手渡す。

表面が傷付き、プラスチックの本体は僅かに粘り気を帯びている。

「誰かの落とし物か……？」

随分古い形の携帯電話だった。D O C C O M O P 2 0 1 i。型番が液晶の上に残っている。今時珍しい棒形の機種だ。

小振りですっきりと手に馴染む形をしているが、いかんせんデザ

インが数世代前。見た目が古い。センタージョグダイヤルは押すとカチカチ硬い手応えを返す。親指が疲れそう。

「ぎりぎりカラーか……。つか、液晶ちっちえー」

霧島がそんな感想を洩らしながら、バッテリーが残り僅かなそれを、どれどれと早速あれこれボタンを弄くる。まずは通話記録からだ。

一番最初の記録は五月八日、つまり今日。時刻は午後九時十九分  
つい先程だ。

発信先：佐々倉沙耶子。

うちのクラスメートだ……。席が近い。あたしも何度か声を交わした記憶がある。大人しくて、どちらかと言えば教室でも目立たない方……。

嫌な、嫌な何かを感じる。

「霧島……」

彼と顔を見合わす。じゃあ、この電話の持ち主は？

もし故意に彼女をここへ呼び寄せた。なんて事があるとしたら

……。  
だんっ！

結論に達する前に、きびすを返し廊下へ飛び出した。

「俺はこの階を探す！ 石川、お前は下行けっ！！」

「分かった！」

彼の号砲に合わせるように、あたしは大声で叫び返した。

## 8・尚、立ち上がる(前書き)

戦闘開始です

## 8・尚、立ち上がる

静寂を切り裂く様、二つの大きな足音が響いた。

あたしは階段下を目指す。

でえええいつ!!

一気に勢いを付け跳躍する。じんと足の裏を打つ痛みも、今は気に留める余裕も無い。時は一刻を要する。

「佐々倉さあぁんツ!!」

あたしは喉を盛大に震わせ、走りながら彼女の名を呼んだ。  
畜生。

冗談じゃない。

冗談じゃないぞ。

御子神さん曰く、怪物化した人物は理性が失われるとの話だ。そして自らの捕食の為、次々と周囲にいる人間を襲う。極めて凶暴な存在なのだ。

くそつ。

走りながらまた心の中で舌打ち。

心臓の鼓動が早瀬の様に高鳴り、あたしはそれに負けじと廊下をひた走る。

これ以上……。もうこれ以上犠牲者を出してなるものか!

「佐々倉さあぁんつ!」

もう一度、声を大にしてあたしは張り叫んだ。あたしの咆哮が深夜の校舎内に木霊してゆく。

鍵の掛かっている扉があれば、逐一叩き壊す(実にとんでもない事をしている訳だけれど)。明かりを点け、教室の中を覗きそこに居ないと判れば即座に移動してゆく。無駄な時間は割いていられない。

1-3教室を見て回り、次は1-4へ。廊下へ出ようとした時の事だった。

突然、背後で鋭い爆発のような物音がした。中庭に大量のガラス片が降り注いできた。

はっと釣られて振り返ってみれば、そこには霧島が倒れている。あたしは窓の方へ駆け寄り「霧島、大丈夫!？」と声を上げる。

起き上がる彼は、返事の代わりに銃声を轟かせた。

上の階目がけ、発砲。

立て続けにガラスが割れる物音がまた響いた。

きん、きんと石畳の上で空薬莖が踊る。

(敵)

あたしはさつ、と天井へ視線を這わせた。今この真上に化け物が居る。

「石川! 佐々倉は見つかったか!？」

銃を連射しながら霧島は訊ねてくる。

「まだ!」

あたしが叫び返すと彼はこう命じた。

「ここは俺に任せる。行け!」

「うん、分かった!」

返事の後に踵を返す。

未だシュタイヤーM9の発砲音は続いている。

鼓膜に9ミリパラベラム弾の発砲音を刻み、再びあたしは廊下へ駆けだした。敵が動いたと云う事は、最早一刻の猶予もない。

1-4教室。スルー。

直感であたしの本能がここには居ないと判断を下す。角を曲がり昇降口へと抜ける。

学生食堂へと続く長い廊下の先に、ちらりと一瞬光が過ぎった。

あれは、まさか。

「佐々倉さん!」

多分間違いないとあたしは見当を付け、大声で彼女の後を追った。幸い霧島達と距離は離れているのが良かった。まだ敵には見つからずにいる。



廊下の幅が突如広がり、学食前のホールへとあたしは出た。そこからへの扉は、今は封鎖されている。自販機の影から物音がして、途端振り返ると

「っ！」

突如眩しい光があたしの目を襲った。懐中電灯の光だ。

「誰!?」次いで女の人の声が出た。

「佐々倉さん……?」

あたしはもしやと思い、彼女に訊ねてみた。

「あたし、三年一組の石川」

「……いしかわ、さん?」

相手は光源の位置をずらし、逆に訊ねてきた。暗闇に互いの表情が浮かぶ。

「どうしてこんな所へ」

彼女は驚きつつあたしに訊ねてきた。無理もない。

だが、それを今説明している余裕は無かった。

「さっきから向こうで変な音がするの。由美子からの電話で『学校に来て』なんて呼ばれてみれば彼女は見つからないし……。ねえ、一体何が起きてるの? さっきの銃声は?」

矢継ぎ早に質問を浴びせてくる彼女の手を取り、

「来て。こっちは危ない」

あたしが口早にそう言う。まだ彼女は事態を飲み込めていない。

「危ないって……一体何が」

混乱醒めやらぬ彼女の手を取り、強引に引き寄せせるや来た道を引き返す。

「ねえ! 石川さん!? なに?! 一体何なの!?!」

背中で佐々倉さんの悲鳴が響くが、あえてそれは無視した。今は昇降口から脱出する事の方が先決だ。

天井の方からズズと、振動に合わせて塵が落ちてくる。

敵が、近い。自然と彼女の手を握る指に力が込められてゆく。

(霧島……)

あたしは一瞬、奴と交戦中の彼の身を案じた。

西口ホールの前を通り過ぎた。脇にポリッシャーが立て掛けられた、通用口の扉を抜けた。

「さあ、急いで！」

目的地まであと僅か。

だが直前。ゴールを塞ぐ形で、激しい衝撃が真横のサッシ戸を襲った。

雪崩を想わせる破竹の勢いと共に、ガラスを突き破り現れた大きな黒い影。

「ちい！」

もう追い付かれたというのか。

最悪の形に追い込まれたあたしは、つい舌打ちを零した。

柄に手を添える。

……やるしかないか。

この場を切り抜ける方法は、最早それ以外に無い。

頬から冷や汗が滴り落ちる。

あたしはぺろりと舌先で唇を濡らし、奴を見据える。

「下がっていて」

鞘を構え背中の彼女に命じた。

す、と鞘から白い光が零れ引き抜かれる。

ざらりと鋭い光を刃の峰は宿した。

「彼女には指一本触れさせないよッ！」

あたしは啖呵を切る。

つ、と親指を刃先に這わせ、カウンターウィルス　あたしの血

液をそこへ付着。

さあ来い！　これで戦闘の準備は整った。

邪魔な黒塗りの鞘は投げ捨て、あたしは身構える。

「な、何あれ……？」　闇に蠢く怪物の影を捉え、佐々倉さんは怯

えながらあたしに訊ねてくる。

「見ての通りよ　化け物」

屹然と敵を睨むあたしは、静かにそう答えた。奴の影から佐々倉さんを庇う様に、一步前へ踏み込む。緊迫した空気がそこに漂った。互いの距離は、凡そ十五メートル。

くびれた曲線から覗く一対の長い脚や、重そうに引きずる奴の袋状の尾が、あたしに女王蟻を想起させた。

醜いフォルムは肥大した四肢をも晒し、長い手足を着き奴が前屈みに攻撃の構えを取る。

（来る！）

直後、あたしら二人をめがけ、怒濤の勢いで奴は襲いかかってきた。「すうつ」

肺に呼吸をため込む。

あたしは正眼に構え、全速力で前へと駆け出した。

「おおおおおおおッ！！」

一気に間合いを詰め、刀を振りかぶった。

先の先を取る。狙うは奴の脇腹。先ずはその、醜い邪魔っ気な中脚からだ。

ヒュン、とこちらめがけ放たれた拳が、まるで弾丸の様あたしの顔を狙った。

おおっと！

すんでの所であたしはそれを回避。皮一枚を掠め、後方へ流れ行く。

それを横目にあたしは突進。二射目は右からだ。斜めに走る形でそれを躲し、植木鉢が粉碎。

あたしの間合いだ。

切っ先を滑らせ、一気に懐へと潜り込む。

「でやあああ！！」 ザシュ！ と肉薄の後、豪快な斬撃が遅れて空を風いだ。烈拍の気合いで打ち込まれた刃先が、見事伸びかけの脚を捉える。

『ギエエエエエエエ！！』

肉を断たれた怪物が悲鳴を上げる。斬られた箇所から黒い血が飛

沫き、あたしの顔面と衣服を汚す。

「もういつちよ！」

空かさず同じ箇所を狙い打つ。怯んだ今が好機と、全力で刀を叩きつけた。

『ギューエエエエエエエエエエツッ！』

怪物の咆哮が肌を震わせる。返す刀で傷つけられた悲鳴が、辺りに轟き渡る。

甲殻類を想わせるさせる脚は完全に断ち切られた。

歪な残骸を足下に転がせ

『痛いよ、痛いよ沙耶子オオ……』

残された意志で、怪物が人間の悲鳴を上げる。「由美子！？」

悲痛な叫び声に反応し、今まで隠れていた佐々倉さんが前に乗り出した。

危ない！

「駄目！ 佐々倉さ」

咄嗟に飛び出したあたしの身体が、突然宙に弾かれる。

「ぐうっ！？」

勢い良く伸びてきた奴の長い腕が、あたしを視界の外から風ぎ払ったのだ。

余りに突然の事態に気を取られ、受け身の構えを取る暇も無かった。

あたしの身体が宙に浮く。あたしは地から引き剥がされ、衝撃に彼方へと突き飛ばされる。

「がはっ！」

後方では頑丈な柱が待ち構えていた。あたしは強引に背中から叩きつけられ、思わず肺から空気が零れる。

一瞬意識が飛びかねぬ勢いだっつた。

「石川さん！」 悲痛な叫び声が遠くから聞こえる。

「やめて……やめてよ由美子お……由美子なんでしょ？」  
がっ……。

身を起こし体勢を整えようとするあたしの背骨に、突如形容しがたい激痛が迸る。

「あ、ヴツ!!」

思わず身を竦ませた。何本か骨をやられたみたいだ。

く、くそおっ……。

肘を付き、額からは大量の脂汗。荒い息を吐き、それでも顔を上げようとする。

視線の先に、二つの影。

異なる一方の影は、あたしの倒すべき敵。もう片方は、あたしが全身全霊を掛けて守るべき、か弱き乙女。あたしのクラスメートなのだ。

こんな所で倒れていられるか!

「その娘に手をあげたら……」 はっ。

はー……っ。

ふらつく頭を押さえる。

「くう……ぐうううううう!」

震える両膝に力を込め、あたしは立ち上がる。

「マジ半端容赦しないよ!」

## 9・さよなら、ブレード

満身創痍の身で、尚立ち上がるあたしは真の勇者だ。

まだ勝負は終わっていない。あたしの目の中に宿る光は、まだ輝きの意志を失ってはいない！

敵を睨み吠え叫んだ。

刀を杖代わりに立ち上がるこのあたしを、目の前の敵は邪魔者と見なした様だ。

窪んだ眼窩に覗く赤い光は、あたしを捕らえ。

強襲。

間接がしなり、鞭の様振り払われた腕に再度あたしは吹き飛ばされる。

「！」

まるで木の板の如くあたしは突き飛ばされ、今度は頭から下駄箱に激突。同時にミシリとあばらの悲鳴を聞く。骨は内蔵に突き刺さり、あたしはごふつと赤い喀血を散らす。

「石川さん！！」

やばい、やばい、やばい……。

悲壮な叫び声があたしの耳に響くが、未だ身体のダメージは抜けない。

体中が痛くて立ち上がれず

「立って！ 早く逃げて！」

あたしを急かしたてる声に、無茶言つなあ……と一瞬思いを巡らせる。

やば……。

敵の重い足音が近づく。

ずん、ずん、ずん、と。そこに死の足音を刻み両腕を振り上げて。黒いシルエットがあたしの目の前で止まり、影を射した。

喰われる。

あたしは

このまま死ぬ。

奴に殺される。

……冗談じゃないぞ。

「……けて」

あたしは小さく息を漏らし呟く。「負けて……」  
死ぬのは嫌だ。

でも、守りきれずに死ぬのはもつと嫌。

カリリとあたしの爪先がタイルの表面をなぞる。

呼吸を吸い込み、喉から吐き出す。感情の導火線に火を吐け、それを爆発させる。

「たまるかああああああああああああっっっ！！！！！！」

あたしの絶叫は意志の炎を纏い、周囲の絶望を尻ぎ払った。  
そして

「石川あああ！」

最高のタイミングで駆けつけたその声は、同時に複数の発砲音を耳に轟かせた。

霧島だ。

大口径の銃を以てして放たれたその銃弾に怪物は怯み、あたしに振り上げた腕を止める。

猛然と彼はダツシュした。

「オオラッ!!」

突如跳び上がり、足を開いて空中後ろ回し蹴り。

ティミヨ・360。トラ・ヨプチャルギ。

テコンドーの大技が豪快に怪物の側頭部に炸裂!

巨体は薙ぎ倒され、華麗にその足下に霧島は着地する。

「悪い、遅刻した」

「遅すぎなんだよ馬鹿やるー」

無茶苦茶格好良い登場の仕方を見せつけてくれるじゃないかこの

ヤロー!

あたしは嬉しくなり、わざと彼に憎まれ口を叩いた。

「立てるか?」

「ん。平気」

差し伸べられたその頼もしい腕を取り、あたしは今度こそ起き上がる。

「さあ、リベンジと行こうや」

「おう」

「嫁を傷つけた罪は倍返して払ってやる」

いやいやいや嫁ちゃうし。

あんたあたしの彼氏でもなんでもねーし。唯の相棒だし。

「ツッコミご無用!」

「読心術かいつ!!」

……結局こうなるのよね。霧島は所詮頭のイタイ子であたしは振り回される運命なのね。

よよよ……。

でも、自然と口元には笑みが零れる。

しゃあない、いっちょやったるかい!

「石川、回れ!」



あいよっ！

痛みはどこかへ消え去っていた。

ブツ！ と霧島がマガジンに唾を吹きかけ、弾を装填。七発入りの彼が今手に握る得物はコルト・ガバメント。強力な破壊力を秘めた傑作中の傑作銃だ。

フレームはカスタマイズされ、ロングバレルに交換されたハードボラー仕様。四十五口径の銃口は跳ね上がり、火花を散らす。

ガン！ と鼓膜に突き刺さらんばかりの大音量を奏で命中する銃弾は、骨を砕き、肉を食い破る！

流石はメイド・イン・アメリカ。

こいつの威力は伊達じゃない！

霧島の先制攻撃に加え、あたしは怪物の背に回り込み刀を一閃する。

ざん！ 刺突の鋭い刃が肉を抉り、怪物の心臓部まで到達。

『ギユヴァアアアアアアアア……！！』

怪物が苦悶の悲鳴を撒き散らし、辺りにのたうち回った。今のは決定的だった。

「これで……」

突き立てられた刀を一旦引き抜き、あたしは再び血糊を流す。

鮮血に染まる刀身。

終わりにしよう。

霧島と一瞬目を合わす。

頷く。

あたしは手に刃を。

彼は弾丸を。

おやすみ。

斬突と重なり合う一発の銃声。核を捉えた。  
再び、絶叫。

破壊された箇所から結晶化が始まり、ぱりぱりと白いひび割れに  
全身が覆われていった。

ざんっ！

そして。振るわれた最後の一撃は。

『 沙耶子おおお……！！ 』

直前……首を刎ねられる寸前に放たれた悲鳴が、あたしの耳に焼  
き付いて離れなかった。

それは脳裏に響く、純粹な 悲鳴。

助けを求め叫ぶ、ほんの僅かに残された彼女の人間としての……

……理性だったんだ……。

クラスメート。

出席番号は、5番。

学級委員、大沢由美子の遺体が目の前に転がっていた。

立ち竦むあたしの目の前で、破られた窓から流れてきた夜風が銀

色に風化した彼女の遺体を、まるで砂の様にどこかへさらってゆく……  
跡形も無く吹き飛ばしてゆく。  
ほんの刹那の、それは幻の様な出来事。

佐々倉沙耶子が。

呆然と虚ろな表情のままいつまでもそこを見つめて。

「由美……子……」

同じ様に消え去った少女の、愛しい名前を具に呟く。

声は静寂にかき消される様にやがて溶けて。

ぺたんと、そこに緊張の糸が途切れ座り込んで。

「……終わったな」と、一人霧島が静かに言葉を紡ぎそれを声に出す。

あたしは勝利した。あたし達は、また一人クラスの大切な仲間を  
守り抜いた。

でも、この胸に浮かぶどうにも遣りきれない思いは……。

つう、と透明な涙が静かに頬を伝ってゆく。

気持ち悪かった。

そしてただただ、今は悲しかった。

胸が押し潰されそうな想いに駆られあたしは一步も動けない。

風が表の桜の木の枝を揺らしている。

「帰ろう」

やがて静かに、霧島の声があたしの背中に掛けられた。

ひっそりした校舎に、唯一つ大沢由美子の髪飾りが忘れ去られた  
様に　そこには残されていた。

## 10・かなしみチロル

「お疲れさま」

校門を三人で抜けるとすぐそこに。

「あ、御子神さん……」

そう。あたしらのボスが路肩に車を停めて待っていてくれたのであった。

「無事任務完了です」

「そう。本当に二人とも無事で何よりだわ」

霧島の報告に口元にチャームングな黒子を一つ覗かせ、頷く彼女。怪我はない？ とにかく、車で自宅まで送るわ」

すぐ隣のトヨタ・ハイエースワゴンのスライド式ドアを開け、優しくあたしらを招く。

「ういゝ。疲れた……」

満身創痍の身で霧島を一番奥に、彼、あたし、そして佐々倉さんの順で車の席へ座る。あゝもう、このまま眠りに就いちゃいたい勢い。

ちくしょー作者てめーおぼえてろよ……。あの、石川さん……」

「ん……何？」

疲労困憊。心も体も疲れ切っていたあたしは、席へぐったり体を預けながら、声だけ彼女の方へ向ける。気力が尽きかけている。

「さっきの出来事……あれ……」

「……………」

どう、返事をしたら良いのだろう。彼女がつい今しがた目にした形容しがたい物。友達の死。あたしらの、直接その出来事への暴力的介入

ソ スタルビー i n g じゃ無いけれど……

霧島、なんか代わりに答えてよ……………。

あたしの隣で今、彼はそつと目を閉じ何か物思いに耽っている。  
ごめん……あなたも、あたしと一緒に……。。

うつん、この場にいるあたしら全員が、それを口にするのを  
今は躊躇っているんだ……。

御子神さんも、決して今は振り返らない。

夜の商店街をあたしらを乗せた車は唯、走り続けている……。

信号で一旦車は停まる。かっちゃんかっちゃんと、規則正しく  
車内にウインカーの音だけが零れている。

重い沈黙に耐え兼ね、御子神さんはカーステレオのスイッチを入  
れた。

間もなく夜の十二時だ。日付が変わる。

ジェットストリーム。JAL提供のあの深夜番組のBGMが。  
飛び立つ飛行機。

あたしらの思考。

遠い。遠い彼方へ導いてゆく……

それぞれの、遠く深い彼方へ……。

車は走り始めた。

御子神さん。少しパワーウィンドを下げる。

冷たい夜風。

南国。パラオの話題。

ラジオ。まるで異世界の話。あたしらには手が届かない。

あたしらは……どこへ辿り着けば良いのか……。

船は岸边へ決して辿り着けない。どこまでもどこまでも。果てし  
ない漂流。沈没はきつと間もなく。

フロントガラスにポツツと雨粒が当たり、「降り出してきた」  
と霧島が視線を窓へ向けた。

「……迎えにきて正解だったわね」と御子神さん。

「家、柳橋の方だったけ？」

「ハイ ……あ、途中のファミマの前の所で良いッス」

再び、車内を満たす沈黙。もう殆ど車も通らない。真夜中の町。

幾つかの信号を越えて東瑞野江駅　そのすぐ脇のコンビニが見えてきた。手前の赤信号でまた車が止まる。近くにはアパートが何棟も並んでいる。

「あ、そうだ……」

もぞり、と霧島が上着のポケットから何かを取り出した。あたしを跨ぎ、それを彼女へと手渡す。

「落ちてた」

それまで俯いていたままの佐々倉さんが顔を上げた。ちらりと視線を合わせた。

罅割れた、大沢由美子の遺品。あの場所に落ちていた藤色のバレツタ。彼が頷く。

「……ありがとう」

それは、とても小さな……

小さな小さな、彼女なりの感

謝の言葉だった。

車が止まる。

「着いたわよ」

「どうもツス　それじゃあ……」

あたしらは車から降りてゆく霧島の背中を見送っていた。

あたしは霧島の顔を見ていた。何か声を掛けてあげようとかとも思った。けれど、上手く言葉を導けなかった。

「お休み、霧島君」

御子神さんの代わりの一言の後、彼は小さく頭を下げ、そのまま振り返りもせず夜のコンビニの方へと消えていった。なんだか切なそうにも思えた。あたしも恐らく……、一緒だ。

車はやがて動き始める。

「ええと、石川さん？　悪いけど先にその娘送ってあげようと思うんだけど」

構いませんよ、とあたしは一言。御免ね、と気遣う言葉の後、佐々倉さんに住所を訊ねた。意外とこの近くだった。

「……由美子は」

ぼつり。

まるで突然俄雨が降り出すかの様に、佐々倉さんが口を開いた。

「あたしがあげたこのプレゼントをとても気に入ってくれたの。沙耶子はセンスがいいって」

それは深い深い、回想だ。あたしは唯耳を傾けるばかり。

と、突然きゆるきゆると、あたしのお腹が鳴る。

おいっ……

雰囲気無しだよ。

「ぶ」

と突然吹き出す佐々倉さんと御子神さんの二人。

何という間の読めない体か……。うひゝ恥ずかしい……。

「はいこれ」

赤面するあたしに小さなチロルチョコが差し出された。笹倉さんから。

『みたらし団子』

……うん。時々変な味出すと思うんだよね。最近のチロルチョコはとっぴも付かないような。頂きます。

銀紙を取ると仄かに甘いホワイトソースの香りがあたしの胃袋を刺激して。

おや……。？ 意外といけるよ、これ。

甘さ控えめのみたらしソースと、中身のプチお餅が程良くマッチング。やるなあ松尾製菓……。

「うん……美味しい」

あたしは小さく声に出し素直な感想を呟いた。

「『さくらもち』もいけるよ。春限定なの」

ほろ甘さは優しくあたしの胃の中へと落ちてゆく。……ごちそうさまでした。

「……笹倉さん」

あたしは可愛いデザインの包み紙をそっとポケットに忍ばせた後、漸く気持ち落ち着いて静かに口を開いた。

「うん」

彼女はあたしの次の言葉を待っている。

「明日 学校でちゃんと何があったのか 話すから……」

「うん……」

返事はとても静かな物だった。

ほんのちよっぴり救われた気持ちになって、屋根を優しく雨粒は濡らした。夜の灯がきらきら輝いて映っていた。



## 11・捨てるぞ斬鉄犬

佐々倉さんを先に送り、そしてようやくあたしが家に着いた時にはもう真夜中の一時。年頃の娘が帰宅するには明らかに不謹慎な時刻だ。

御子神さんの車が遠ざかる音を耳にする。「石川」と表札の書かれた門扉を過ぎれば愛しの我が家だ。

案の定家中の電気はもう消えている。庭の隅に置かれた犬小屋では、我が家の飼い犬が寝息を立てている。

「た・だ・い・ま・あ〜」

そろりそろり。「五戸門」と書かれたその小屋の前を忍び足のまま通過してゆく。

起きるなよ〜……。

頼むから吠えたりするなよ〜。

そんな事を心に念じながら、前進。地雷原並みにパネエツす。

これで吠えられたら『こんな時間までどこほっつきあるいてたんじゃワレエー!』とマイファアザーのサンダガが落ちるのは目に見えるているのだ。くわばらくわばら。

我が家の柴犬はすやすや寝息を立て御睡眠中。可愛いものだ。

よっしゃ、そのまま「来世まで」眠っとくれ。

あと二メートルじゃ〜。一メートルじゃ〜。

鍵を取り出す。

「うそ〜うそ〜」

“NaNa”のちっちゃなマスコットの付いた鍵を上着のポケットから取り出しミッシェンコンプリートいやっほおおおー!

しませんでした

あろう事か今の物音に目を覚まし、五右門はぱっちり目を見開く。  
つばらなおめでしっかりあたしをロックオン。

うん　ホエラレタネ。バッチリ。

お前番犬として最高だよ。

……死ねばいいのに。

『バウバウバウバウ!!』

「黙れ松村あああああああ!!」

なんだろねこのやり取り。結局目を覚ましちゃったよ。近所迷惑  
だっと思いつ切り怒られたよ。

何故か姉婿に。

「駄目だよ真由ちゃん。こんな真夜中に五右門と遊んでちゃ」

……あたしの存在に今まで気づかなかったのかい太郎さんよ？

「こら、五右門。めっ!」

天然癒し系というか全体ほんわかした雰囲気のおーラを放つ太郎  
さんが、一回叱りつけただけで五右門は大人しくなり、「くうくん」  
と頭を垂れる。ド畜生。あたしには絶対懐かない癖に。癒しか？  
癒しのおーラがあたしには絶対不足してると言いたいのか？

所詮、暴力女ですが何か？

「真由ちゃん、袖……汚れてるよ？　血じゃない？」

うわ。あたしがちよいと気を取られている間に目聡くそれを太郎

さんは見つけたのだ。怪我でもしたのかい？ と余計な詮索を入れられる前にさっさと逃げてしまおう。

「あは、あははは……」

誤魔化し苦笑いを浮かべつつさっさと家の中に入る。大分靴底のすり減ってきたあたしのVANSの靴紐を解く。僅かに血が付着していた。「……」

「真由ちゃん？」

ぼおっとしていたからだろう。玄関に座り込むあたしを、太郎さんが背中から声をかける。

「電気、もう消すよ？」

「あ。はい……」

太郎さんは一階の寝室へ戻ってゆく。

あたしは明かりの落ちた暗い部屋で、一人未だ座り込んでいる。

「ばかやろう」と、誰に向けてそれを責めるのではなく、闇に呟いていた。

12・乳房に爪を立てる(前書き)

第二章開始です

## 12・乳房に爪を立てる

旭君の、夢を見た。

朝、目が覚めると泣いていた。夢の世界で何度も何度も彼に謝っていたような気がする。唯の夢ならよかったのに(……………)

「うん……………」

弱々しい声と共に、やや火照りのある頭を振るう。そして、枕から首をのける。全身はなんとなく、だるい。

「……………お風呂入んなきゃ」

昨夜はさんざん動き汗をかいていたというのに、疲れのあまりそのまま寝てしまった。パジャマに着替えてすらいなかった。

「……………」

立ち上がるとまだ少し、背中にきりりと痛みが走る。

でも、あたしの体は非常に便利になっていて、昨晚のあの闘いで受けた傷も、あばらに受けた罅でさえも、もうかなりの勢いで治りかけている。

あたしは姿形こそ全く変わりはないが、中身はやはり怪物に変わりかけているのだ。　　気持ちが悪い。

カランのお湯を捻り、勢いよく桶に溜まった水で、打ち湯をする。かさぶたの上をお湯は流れ落ちてゆく。

滑稽だ。ひどく、滑稽だ。

あたしは皆と同じ恐怖を分かり合えない。あたしは皮肉めいた幸運の上に彼、彼女らと違う存在として生まれ変わり、これからの人生も約束されている。

嗚呼、それは喜ぶべき事なのだろうか。

あたしを愛する人たちは確かに存在して、あたしの消失を彼らは

決して望んではない。望むはずもない。

「くっ」

胸の奥から、罪悪感という鋭い茨の棘がはみ出しあたしを突き刺して行く。がんじがらめにしてぼろぼろに破壊して行く。心を、ただひたすらにあたしは破壊されて行く。それを止める手段すら知らない。

薄いあたしの乳房にやがて爪を突き立てる。血は、温いシャワーのお湯と共に流れて行く。決して拭えない、罪という名の垢は、どうしてもどうしても、洗い落とせない。

いつも使っているシャンプーが切れかけていて、鏡の前にそれを求めると、代わりにリラクマのボディ・シャンプーが。もうこれでいいや。

泡立て、洗い、すすぎ。

それから短く湯船に浸かる。生憎リンスをしている時間は取れなかった。

俄に家の中が騒がしくなってきた、家族が起き出してきた事をあたしは知る。さあ、もうあたしも準備を始めなきゃ。

ざぶんと湯船から上がる。

始まりの朝。憂鬱なあたしの、苦しみの始まりの朝。

「おはよーまゆちゃん」

脱衣所から抜けると、もうお目覚めで元気いっぱいいな、あたしの姪っ子のなっちゃんが駆け出し擦り寄ってくる。この子を抱きしめると、暖かな日向の匂いがする。

「おはよう、なっちゃん」

バスタオル姿のまま抱き締め優しく髪を撫でてあげると、彼女のやわらかい髪はあたしの手のひらを受け止め、そしてなっちゃんは嬉しそうに目を細めて、あたしにぎゅうとより一層強く抱きつく。

「うん。美味しそうだななっちゃん。真由おばちゃん食べちゃっぞ〜」

きゅっきゅと喜びの声を上げながらやがてなっちゃんはあたしの

下を離れて行く。もう少しだけこの暖かさに包まれていたい。

そんな名残惜しさを、内に留めながらあたしは二階へ上がる。父が髭剃をしていた。

後ろめたさを抱えながら、そつと後ろを通り過ぎようとする。

「真由子」

その声に案の定、あたしはびくつと反応し思わず足を止める。父は昔から何故かあたしの事をまゆこと呼ぶ。いつの間にかそうなっちゃったから、あたしももうそれに慣れてしまっていた。

怒られると思った。

あたしの耳に電動髭剃機の音だけが響いていた。父が口を開く。

「風邪引くぞ。お姉ちゃんがご飯の支度しているから、早く着替え下りてきなさい」

それだけだった。

父はこういう時、秘かに機嫌が悪い。

「はあい……」

しゅんと萎れた花びらみたいに首を竦め、あたしは洗面台の前を通り過ぎる。あたしは最近父の機嫌を損ねる事が多い。理由は大抵、あの怪物絡みだ。

あの隕石の所為であたしの家族関係すら、陰りを見せ始めている。

「ごめんなさい……」

こんな時交わす会話の一つ一つに、あたしはひどい、息苦しさを覚えてしまうのだ。

せめて外は晴れてくれればいい。

### 13・世界はあたしに甘すぎる程に

ぼつぽつと傘の穂を打つ雨粒が、あたしの足取りを重くする。お姉の作ってくれた朝ご飯はぼつちり美味しかったけれど、あたしの心は何故か曇り模様。

まるで、母を亡くしたあの寒い冬空の様だ。

出掛ける前、あたしは母の仏壇に線香をあげ拜んでいった。ちんと透明な鐘の音が、密やかに和室六畳間の空間へ、染み渡って行く。母の遺影は、とても穏やかな笑顔だ。

「にやむにやむにやむにやむ」

あたしが拜み終わる頃、隣にちよこんと腰掛けていたなっちゃんが、小さな手のひらを合わせ拜んでいる姿を見た。いじらしく、とても可愛らしい。

無垢なこの祈りはなんとも美しい。なっちゃんの瞳に死とはどう映っているのだろう。

仏壇に上げられた蜜柑を、一つ。

「よくできました」

「ご褒美とばかりに、なっちゃんに手渡す。嗚呼、こういう優しさを与えてくれる命は素晴らしい。」

「ありがとう！」

なっちゃんの顔面にぱつと花開く笑顔は、まるで野原に咲きたんぽぽの様。

「真由子、そろそろ出掛けないと遅刻するぞ」

「うん」

襖の向こうから声を掛けてきた父にそう答え、鞆を手を取った。

「いってらっしゃい」

「うん、行ってくるね。なっちゃん」



ほっぺにちゅうをして六畳間を後にする。

「遅くなるのか？」

「んーん？ 分かんない」

踵の柔らかくなつた靴に足を通しながら、父の質問に答える。

「今日、寿司買ってくるから早く帰ってきなさい」

「……うん」

もしかして、父はあたしの異変に気付いているのではないだろうか。

さり気ない心配りに父の優しさを感じた。あたしの一方的な思いこみに過ぎないけれど。

「あ、真由ちゃんいつてらっしゃい」

家を出る時、ちようどすれ違いざまに五右門の散歩から戻ってきた太郎さんと出会う。

「行つてきます」

「雨降つてきてるよ。傘、忘れないでね」

優しい笑顔と共に教えてくれた。あたしは愛されている。母を亡くしても、代わりに沢山の沢山の人から。

世界は、あたしに甘すぎる程あたしを幸福で満たしてくれる。

逡巡という言葉さえ、一時忘れさせてくれる程に。

学校までの道程は、近い様で遠い。遠い様で近い。思考が距離を分からなくする。

最寄りの駅までは一度川を越え、そこから新緑に染まり始めた並木の一本道を、どこまでもどこまでも真っ直ぐ住宅街に沿い歩き続けねばならない。

途中、黒猫とすれ違った。

イヤホンから聞こえるアンジェラ・アキの歌声は、今の足取りと

そぐわなくて途中i podを止めた。

駅ではSuicaが切れかけていたので、千円を投入してチャージした。菜月乃の街は、最近変わり始めている。

クールミントガムを味わっている内に、電車はホームへと滑り込んできて、停止した。あたしのちょうど真ん前だ。

箱型の乗り物は大抵窮屈だ。それは強制的にあたしと世界との距離を狭めようとする。

開いた乗り口の奥へ足を進め、手摺りに腕を絡める。ふるふるとモーターの振動が足下より伝わり、始動。景色が後方へ流れ始めて行く。

旅に出たいと、不意に思う様になった。

電車の中吊り広告がTYO北陸の、一泊温泉旅行の案内をぶらぶら揺り動かしている。

なんだか、あたし最近疲れているなあ

とりとめのない思考を揺らし、電車は北へ北へと向かっている。英語の予習をし忘れた事を、駅を下りる寸前、ふと思いついた。

ものっそい鬱だ。

14・その歌詞はおねーさんどつかと思っぞ？

かびるんるかびるんるんぼくたくちは  
一生いつしよ〜さかびるんるんるん

校門すぐ脇に見える池の側。調子つばずれな明るいテンポで、あ  
たしの友人が替え歌を歌っていた。  
なにげに嫌な歌詞でしたよ、ええ。

くわつくわつくわつくわつくわつかびるんるんるん

何故にやなせたかし節なのか。

くわつくわつくわつくわつくわつくわつ……

『ペガサス流星拳！』

「ちょ、まてい！！」

何故に聖闘士星矢っ！？

思わずツッコまずにはいられなかった。飛躍し過ぎたる！

「ほよよ？ 真由りんご用？」

アラレちゃんみたくとぼけた口調で訊ねてきたのは、同じクラス  
の細谷志乃 通称しのつち。ひだまりとは一切関係ない。

「何だよその歌詞はっ！？」

宮崎あおいちゃんが泣いてるよ！ と、まくし立てる様あたしは

質問。

「なあすだあーつく！」

何故に東京株式為替相場市場！？

超イミフな返事をされ、東証株価指数TOPICS本日の終値は0・1円安のアイタタタたたたた　　って、あたしや吉本新喜劇よりも盛大にすつころげ、水飛沫まで舞い散らす始末。

も、訳分かんない。

「くすくすくす」

あたしが一人悶々と悩み叫び、檻の中の野生動物宜しくきーきー唸ってみれば、最早朝の風物詩と成り下がっていたのか

「またやってるよあの人」

と　そんな具合で、道行く人々からガンこつちを見られ笑われているではないか。見せ物にされとるでわなないか。

主にアタシガ。

「畜生見せもんとは違げーぞおめーら！　散れ散れ散りやがれはりあつぷはりーあつぷーッ！」

SATUGAIしそうな勢いで暴れるあたしを横目に

「真由は朝つぱらから大変だねえ」

しのつちはのほほんと話しかけてくる。軽く恨みを抱いたのはいけない事でありませうかそうでごさいますか。

「そつらにいゝ、そびえるう、くろがねのしいろ」

こつちが頭を悩ませている間に隣の能天気女子は、マジンガーZとかチヨイス渋すぎなアニソンをおい頼むからやめろや。

パイルダーオンかますぞ拳で？

「きゃー！　やめて女王様」

もーノリに付き合い切れねえorz。

無性にむず痒くなるのをぐつとあたしは堪え。堪え難きを堪え忍び難きを難きを忍び、ここに終戦の意を以て表するものである

つて今は昭和天皇関係ねえ崩御だ崩御。ポアだ。麻原しようこりん

天皇家の皆さん本当にすみません。

グタグタ90分。

カオスな朝の通過儀礼を無事終え（どんなだ）茶色い煉瓦造りの校舎が見えてきたところで、

「ほよ？」

しのつちが何かに気付き、声を上げた。昇降口前に人が群がっている。

（……セーフティテープ？）

あたしの目の前に、KEEP OUTと書かれた黄色いテープが映る。

「なにになに？ 事件？」

ひよいひよいつ、と人垣をかき分け（まるで忍者みていな動きだ）しのつちは先頭を見に行く。

「おお？ 米沢鑑識官はどこだあ？」

相棒じゃねえよ。少しは現実を見ろい。

右京さんも神戸くんもいねーから。あんたが支持層の広い腐女子な事はよく分かったから。

「お〜い真由りーん」

呼ぶな。超恥ずかしい。

どうせ昨夜の事がらみだと高をくくっていた。御子神さん達の隠蔽工作がやや遅れてしまった所為だろうと。校舎の傷跡は痛いが、まさか死体が出た訳でもあるまい。

そう、あたしは樂觀視していたのだが。

（みんな物好きだなあ……）

今更なに出るのさと欠伸をかみ殺していた時の事だ。とんとん、とあたしの背中を誰かが叩いた。

（んっ？）

首だけ振り返った。そこに現れたのは霧島だ。

「あ……おはよう霧島。夕べはお疲れさん」

そんな劳いの言葉をかけようとした時

「ちよつと話がある」

やけに真剣な表情をして、彼はあたしを連れ出した。校舎裏側にあるプールの前まで来た。

「また被害者が出たぞ」

傍らに置かれた自販機からコーヒーを取り出した後、彼が一言。

「え？」

思わず、あたしは目を白黒させた。

「だって、昨日の件はちゃんと処理したじゃん!？」

「それとはどうも別」

詰め寄るあたしに自分の携帯を取り出し、霧島は画面に映ったある物を見せてきた。

猫の死体だ。

それも、複数。

「この学校が野良猫の溜まり場だって事、お前知ってたか？」

霧島があたしに訊ねてきた。あたしは首を振る。

「今朝その昇降口前で見つかったんだとよ。それも、全部で

十六匹」

うげげ、なにそれその数の多さ……。凄惨な光景を想像し、思わずあたしは顔をしかめる。

「……気になるだろ？」

あたしの表情を見て霧島が説明を続ける。

「で、更に厄介なのはその第一発見者も襲われたって事。尤も、

そちらは偶然人が通りかかった所為で犯人は直ぐ逃げちまったらしいけど。お陰で被害者も軽傷だったよ」

「あんた詳しいわね」

「まあね」

疑いの眼差しで訊ねると、霧島ははぐらかす様に手にした缶コーヒーを啜った。銘柄はB.O.S.S。

……どうでも良いが宇宙人ジョーンズはいつまで地球に居るのか

？ 最早帰化しているのか？（本当にどうでも良い話だ）

「いる？」

中身が半分になったそれを差し出し、あたしに飲むかと訊ねる。  
要るか。誰が貴様が口付けた缶コーヒーなんぞ飲むか。

「ちっ……間接キスできるかと」

発想がいやらしいなあ。

思春期真っ只中か。好きな子のたて笛盗んで舐める口だろぜって  
！。

滅ベセクハラ。

「ま……そういう訳だから。石川も用心しといた方がいいぞ。突然  
お呼び出し食らうかも知んねェ」

そう告げると、ひらり。霧島はあたしに手を振って、校舎とは反  
対方向へ向け歩いて行く。

……あ。こいつサボる気満々でいるな……。

あたしも同じ手で逃げりやよかったと気付いたのは、とっくに彼  
の姿が見えなくなった時の事であった。

ちくしょい。

## 15・不安の種

昇降口に昨夜の生々しい戦いの傷跡が残っていて、何も知らぬ生徒達はあれこれ推測を交わし合っている。囁き合う声は、あたしの心を乱して行く。

堪えられない。不安を隠す様早足に、あたしは三年一組の教室を目指す。扉を開ける。

鞆を置いて自分の席に着くと、佐々倉さんが先に来ていた。彼女と目が合い、互いにぎこちなく会釈を交わす。

彼女の表情は堅い。

互いに何かを喋らなければならぬのに、喉がつかえて上手く言葉を出せない状態だ。

ん、んつとあたしは詰まった喉を鳴らした。そうして昨夜の約束を思い出し、席を立とうとした。

足が意に反し動かない。……逃げたがっているのか？

でも、あたしはちゃんと事情は伝えておかなければならない。きちんとアフターケアをする事もあたしに貸せられた使命なのだから。

「おーっす、石川ー」

あたしが戸惑いを見せている間に、背後から誰かが声を掛けてきた。

振り返ってみれば、そこにはあたしの友人。気の強そうな顔立ちをした、色麻千晶しからちあきの姿が見える。

「よう、なにそんな難しい顔をしてんだ？」

バレー部所属で身長百七十センチ台と、大柄な彼女は「皺になっちまうぜ」とばんばん背中を叩きながらあたしに笑いかけてくる。

しまった、気を逃した。

「なあ、今朝の昇降口のアレ、見たか？」

横にしのつちも加わり、二人は犯人推理に花を咲かせ始めた。勘弁しておくれ。



「真由、あんたどう思う？」

他にも加わった生徒で、教室中に推理の輪が膨らんで行く。あたしにまで意見が求められた。

「あはは……あたし頭悪いからそういうの分かんないわ」

適当に誤魔化し、廊下に逃げて行く。

間もなく教室の予鈴が鳴った。

やがて、体育館で緊急全校集会が開かれた。

朝の放送で皆が集められ、愛しい校長のヅラを拝もう

南無南

無南無　ご利益は特に無い。ちえーシケてんな。

無論、これは嘘。

今朝の警察介入やら、それに関連した一連の不振な出来事への対応である。『えー、皆さんもうご存じの方も多いと思われませんが……』

バリトンががった彼の口から、今朝見つかった猫の死体、謎の不法侵入者による生徒襲撃。それに校舎内で見つけた幾つもの破損箇所など、様々な不可解な事件が述べられて行く。

『それらの事件に関しては、現在警察の方々が捜索中です。校内でまだ作業が続くとの連絡を先程受けましたので……本日は臨時休校にさせていただきます。まだ何が起こるか分かりません。皆さんくれぐれも気を付けて下校する様に　以上です』

くわん、と最後にスピーカーからハウリングが零れて、校長先生からの説明が終わった。

「え、マジ？」

途端どこからか、そんな嬉しそうな声。

「休校だってよ」

「泥棒？……やだ」

「こないだ隕石落ちてきて騒ぎになったばかりだろ……うちの学校

呪われてんじゃねえ……?」

等、様々。周囲にざわめきの輪が広がって行く。皆不安を隠しきれない様子だ。

悪い方向に伝播しきる前にそいつを摘み取らねば……。

(ねえ、ちよっと)

あたしが色々思案を巡らせている間に、後ろにいた千晶が小声で話しかけてきた。

「さつき小耳に挟んだんだけれどさ……。うちの委員長の大沢さん……。夕べから行方不明なんだって。あんた何か聞いていない?」

突然その話題を持ちかけられ、一瞬ぎくつと動揺した。背中に冷や汗が滲み出る。何故千晶がその事を知っているのか。

(ううん。し、知らない! 知らないよ、初耳!)

慌ててあたしはかぶりを振った。

「うん……。そっか……。あたし彼女と家近いからさ。ちよっと気になって……。」

そんな千晶の顔色にもまた、不安の表情が浮かんでいる。

まかか真実を語る訳にも行くまい。

きつついなあ……。

「急に時間開いちゃったなあ。この後、どうする?」

教室へ戻り際、千晶からマツクでも寄ろうかと誘いを受けた。

「ごめん、今日はあたし予定があるんだ」

手のひらを合わせ、友人二人に断りのポーズ。

「……なに? 真由りんが単独行動なんて珍しいね?」

「……ははーん。さては男だな……?」

千晶が鋭く目を光らせた。

「あはは。違う違う」

「相手は誰だ？ 白状しやがれ！」

あらぬ疑いを掛けヘッドロックで絞めてきた千晶の腕を、あたしはするりと躲す。「なん……だと……」

「ホントに大した用事じゃないんだって。この埋め合わせは後日必ず すまん！」

ドロン！ 二人の追求から逃がれた後に、あたしは佐々倉さんの姿を探した。

だが……。

おや……？

彼女の姿がどこにも見当たらない。

全校集会にはてつきり出ていた物だと思っていたのに。

あたしは先を歩いていたクラスの女子に訊ねてみた。

「佐々倉さん……？ 朝から居なかったよ。そっぴやどこ行ったんだろうね？」

返事はそんな感じ。

普段なら、彼女の近くに並んでいた筈の姿が今日は見えなかったと言う。

では笹々倉沙耶子は、初めから全校集会には参加して居なかったという事なのだろうか……？

疑問の種を一つ残しながら、やがて今日の授業は終わった。

あたしが帰ろうとした時、未だ彼女の鞆は教室に残されたままだった。

## 間幕・箱の中身

突然休校となったのをこれ幸いとばかりに、次々と生徒が校舎を後にして行った。

しん、と人気もまばらになった雨の校内を、あたしは三十分かけ佐々倉さんの姿を探す。結局見つからなかった。

仕方なく諦め、あたしも帰ろうと昇降口へ向かう。

その時、霧島からメールが入ってきた。

あたしの下駄箱にプレゼントを用意していたというのだ。それを受け取れと言う。

一体何のつもりか？

ま……。

……まさか告白じゃねえだろうな……

うげげげーっ!!

それだけは勘弁!

ざわざわっ、と産毛が逆立って、鳥肌立ちますた。

超寒気がした!

無い無い! 断じてそれは無い!

認めない!

認めたくないーッッ!

拒絶反応をあらわにしながら、やがてあたしは下駄箱の前に辿り着く。

恐る恐る扉を開ける……。

『愛してるぜ。石川』  
はあと

うぎゃああああああああああああああああああ！！！！？

もしそんなん出てきたら、あたしは卒倒する！

卒倒して火を放ってやる！

えーんがっちょえんがっちょ！

お、汚染物は焼却処分じゃ！

熱処理じゃ熱処理じゃオラあああああ〜！

おk ちと落ち着こうかあたし。

ひーひーふーひーひーふー。

流石に学校の器物壊しちゃアカンだろ。

我を取り戻し静かに扉を開ける。

下駄箱の中には茶色い包み紙が一つ入っていた。

これの事だろうか？

そおつと、それに手を伸ばし重さを確かめてみる。若干、重い。

一体何が詰められているのか、紙を開く。

「……………」

そこには、一振りの刃物が包まれていた。

くすんだオリブ色の鞘が覗く。やや大振りなサバイバル・ナイ

フ 専門的にはシースナイフと呼ばれる部類の物だ。

「一体何のつもりよ……………」

霧島の真意が読み取れない。一枚のメモ用紙が添えられていて、そこにはあいつの下手くそな文字で『使え』と、一言メッセージが残されている。

あいつが今朝話していた用心しとけ、って事なのだろうか…………。あたしは気になる物を感じ、携帯電話を取り出した。

霧島に相談を持ちかけようとした。

だが、どうやら電波の届かない所にいるみたいだ。なんとタイミングの悪い。

「……まさかね」

もう何か事件は動いているのだろうか。霧島は何かを掴んでいる？

あたしは置いてけぼりを食らった気分だ。

「……ああもう、やめやめ」

考えても何も分からない。なら、考えるだけ無駄。

あたしはそう結論づけ校舎を後にする。

喉が渴いた。駅前のスタバに寄っていこう。

あそこのシュガーチェロとキャラメルマキアートは、いつものお気に入りだ。

腹が減っては戦は出来ないと云うし。ふむ。

力を蓄えておかなかちゃ。

誰も居ない部屋。

薄汚れた壁。黴の臭い。埃だらけの床。

曇りガラスの扉には、剥がれかけたのペイントで「コインランドリー」の表記がされてあった。

誰も通らない。

見向きもしない。

駅前裏通り。新築の高層マンションに光を遮られ、その店は日中でも暗い。

霧島亨は今、その中に居る。

壊れたパイプ椅子の背に寄りかかる。

重く、軋み。曇りガラスの向こうに今日の雨模様が広がる。彼の足下に、雨露が零れ落ちた。傘を、持ってきてはいなかった。

亨。うちを殺して欲しいんや……。

寒々しい空の所為だろうか。幻聴が頭に響く。

亡霊の様にその声は彼の記憶に憑きまとい、放そうとしない。忘れさせる事を、許さない。

重い罪の意識に深いため息を吐いた。無論、その声は誰の耳にも聞こえない。彼はたった一人きりなのだから。

携帯電話がワンコール鳴らされた。御子神からの合図だ。顔を上げ、引き戸の方へ視線を投げる、ドアの向こうに一人の影が映った。武器の密売人だ。

「お宅が霧島さん？」

ガラス戸を開け彼を招き入れると、霧島は静かに頷き返した。

「閉めて」

彼に頼み扉が閉められた後、

「この部屋、カビ臭くない？」

男がすん、と鼻息を鳴らして、一瞬端正なその顔立ちを歪めた。あまり裏商売に関わっている者の様に見えないのは、彼がやり手だからなのだろうか。

「P90をご所望だったね？ 随分またおっかない武器を選んだこと」

男は鞆を取り出しながら訊ねた。

P90（プロジェクト・ナインティー）は、PDW（パーソナル・デیفエンス・ウェポン／個人自衛兵器）の一種だ。近年、防弾ベストの着用が一般化してきた戦場に於いて、ライフルで武装できない後方部隊や特殊部隊の火力増強を目的に開発された特殊な兵器である。

広義にはサブ・マシンガンの一種とされているが、その威力は相対に改良されている。公式によれば、百五十メートル先の防弾ベストさえ貫く性能を秘めているのだ。

まだこれを実戦配備している国は世界でも少数だ。

製造はベルギー製。

昨夜霧島が用いた、シユタイヤーム9と同じ、FN（ファープリック・ナシヨナル社）が開発に関わっている。同社は世界で初めてプラスチックを多用し軽量化に成功した、ステアーAUGアサルトライフルでも有名だ。

こちらも取り回しは優れているが、若干今の格好には嵩張る。

市内での戦闘　しかも暗殺に用いるのであれば、得物はなるべく目立たない様、バックに入りきる大きさの物がいい。

集弾性と貫通力。そのどちらを考慮に入れても、やはりP90の方が今回の作戦には打ってつけだった。

霧島亨という少年は、極めて冷静に状況を判断し、それに対応する事が出来る特殊な技能の持ち主である。彼の過去が、無理矢理それを覚え込ませていた。

「確認を」

「うい」

男に促され、中身を取り出す。ジュラルミンケースの蓋を開くと、発砲ウレタンの上に長方形の本体が姿を覗かせた。

P90は、一見およそ銃らしからぬ、未来的且つ独特なフォルムをしている。

機関部はトリガーよりも後方に位置する、ブルパップ方式。



銃身の上に平行に装備された、半透明プラスチックマガジンもまた特徴だ。

引き金の隣にもう一つ用意された大きめのサム・ホール。マガジン内に収められた弾は、銃本体と直角に交わり装填直前に向きを変えるよう工夫が施されている。このスペースの確保により、P90のマガジンは大容量五十発を可能としているのだ。

人間工学に基づきデザインされた、グリップの握り心地は上々。霧島は銃を手に取り、両脇で構えてみた。保持性は高い。

「PS90じゃない本物を手に入れるのは苦労したよ。フルオートを所望との事だったからね」

彼は余程銃が好きなのだろう。アメリカ市場に向け、威力を落とした民間モデルの名を上げた。そちらは安全性を考慮しフルオート機能は除去されている。

「我が儘言っちゃって悪いっすね」

「いいや。問題ない」

密売人は笑顔を交えそれに答える。

「なにか問題は？」

「別に。いつもご苦労さんです」

「毎度ありい」

「出る時気を付けて下さいね。そこ、滑るから……」

居なくなつた部屋でもう一度重いため息を吐く。

「さて……」

石川もちゃんとあれを受け取ってくれただろうか。

霧島は黙って銃をバックの中へ収め、それから店の外へ席を立った。

表の雨足は、次第に勢いを増し始めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5719w/>

---

さよなら、ブレード

2011年9月30日03時10分発行